スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げる体育理論
−「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材の活用−

神奈川県立瀬谷高等学校　平野　太一

【主題設定の理由】

平成28年中央教育審議会答申には、「体育については、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る。」と示され、高等学校科目体育については、「スポーツの意義や価値等の理解につながるよう、内容等について改善を図る。」と示された[1)]。そして、高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編（平成30年７月　以下、新解説という。）には、学習指導要領の改善にあたり留意した点として、「『する、みる、支える、知る』といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実」が記載されている[2)]。

一方で、友添が「いかに体育・スポーツにかかわる知識を学んでこなかったか」[3)]と述べ、体育理論の学習内容の習得状況を危惧している他、複数の研究者が、体育理論の実施状況について芳しくないことを指摘している。このような背景から、大越は、体育理論のアクティブ・ラーニングのロールモデル、教材づくりが体育科教育関係者に求められていると述べている[4)]。

ところで、市川は、教師の一方的に教え込む授業や教師が説明をしない「わからない授業」「教えずに考えさせる授業」に疑問を抱き[5)]、教師の説明、理解確認、理解深化、自己評価の４段階で授業を構成し、基本的な内容を教えた上で、問題解決学習を行う「教えて考えさせる授業」を提唱しており、多くの学校が取り入れ、成果が報告されている[6)]。そこで、体育理論においても知識を基盤として問題解決学習を行う「教えて考えさせる授業」による学習が効果的であると考えた。

以上のことから、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を作成し活用すれば、生徒のスポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができ、体育理論の効果的な授業づくりを提案できると考え、本主題を設定した。

【研究目的】

スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げる体育理論の授業づくりについて提案する。

【研究仮説】

高等学校第１学年の体育理論の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」において、「教えて考えさせる授業」を通して「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材を活用すれば、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができるであろう。

【研究方法】

１　**期間**　令和元年８月26日（月）～９月17日（火）
２　**場所**　神奈川県立瀬谷高等学校　教室
３　**対象**　１年６組40名、１年７組40名
４　**単元名**　体育理論　「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」
５　**主な手立て（学習指導の工夫）**

（１）「教えて考えさせる授業」による学習

表１のとおり学習内容・活動を設定した。

表１　単元の概要

時	学習内容	学習活動
1	スポーツの歴史的発展と変容	教える 講義 ➡ 考えさせる 問題解決学習　振返り
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化	
3	オリンピックムーブメント	
4	オリンピックとドーピング	
5	スポーツの経済的効果とスポーツ産業	
6	自分とスポーツとの関わり方	復習　➡　考えさせる 映像視聴　思考したことを発表　振返り

（２）「する、みる、支える、知る」の視点を学ぶ教材

表１の学習内容に加え、「する、みる、支える、知る」の視点も学べるよう教材を作成した（**表２**）。

表２　教材と学びを意図した視点

時	教材例	学びを意図した視点
1	サッカーとラグビーの歴史	知る
2	バスケのクォーター制への変更	みる、知る
3	平昌五輪の小平・李両選手の友情	みる、支える、知る
4	倫理観によるアスリートの支援	支える、知る
5	ロス五輪の運営の民営化	みる、支える、知る
6	自分とスポーツとの関わり	全て

なお、教材は次のような手順で作成した。

ア　現行及び新解説に記載されている指導内容を把握する
➡
イ　素材を収集する ・学習内容に沿い、生徒の興味の湧く素材（エピソードやニュース） ・可能な限り映像・画像を伴う素材 ・対立構造（スポーツの恩恵と課題、光と影）を持つ素材
➡
ウ　教材を作成する ・両解説の指導内容に加え、視点を学べる素材を選別し、教材を作成

※　素材収集において参考にした資料、書籍、ウェブサイト例

・かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材（神奈川県教育委員会、2017年）
・よくわかるスポーツ文化論（井上俊・菊幸一編著、2012年）
・笹川スポーツ財団https://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx

（３）プレゼンテーションソフトと画像・映像の活用

以下のことに配慮しスライドを作成した。

ア　文字数は少なくし、文字サイズを大きくする。
イ　画像を多く入れ、視覚的インパクトを与える。
ウ　旬のニュースや有名スポーツ選手を扱う。

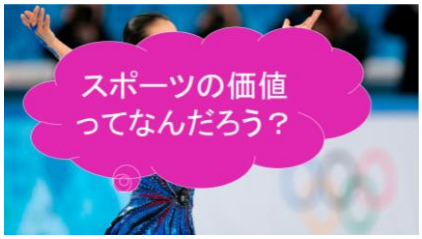


図１　プレゼンテーションソフトのスライド例

（４）主体的・対話的で深い学びを促す学習活動

標記活動として、次の活動を行った。

ア　ペア・ミーティング
　教師からの発問に対してペアで話し合う。お互いの理解確認を兼ねる。
イ　様々なブレインストーミング
　「考えさせる」場面での問題解決学習として行う。
ウ　学習の見通しを立て、振り返る活動
　学習ノートを活用し、毎時間行う。

【結果と考察】

１　生徒が授業をどのようにとらえたか

図２は、事後アンケートにおいて、「体育理論の授業は楽しかったですか」という質問に４件法で回答してもらった結果である。

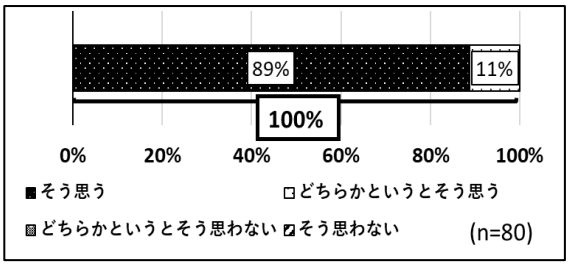


図２「授業は楽しかったですか」に対する回答

「そう思う」と「どちらかというとそう思う」を合わせた群（以下「そう思う群」と言う。）が100%を占め、全員が今回の体育理論の授業を楽しむことができたと考えられる。

次の記述は、授業後の生徒の感想の抜粋である。

「新しい知識を得られたときや“なるほど”と思えたときがとても気持ちが良かった。どの教科よりも体育理論を勉強したいと思うようになった」

このように、生徒たちの感想には、新たな知識を得られたといった趣旨の記述が多数あり、生徒たちの知的欲求が満たされたことが、「授業が楽しかった」と回答した要因と考えられる。

図３は、事前・事後アンケートにおいて「体育理論は必要だと思いますか」という質問に４件法で回答してもらった結果である。

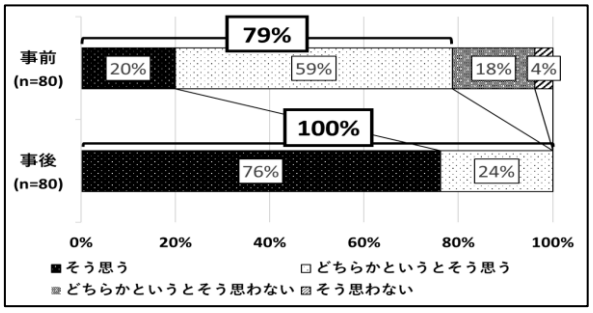


図3「体育理論は必要だと思いますか」の回答比較

事前で「そう思う群」が79%であったが、事後は100%となった。

表３は、「どちらかというとそう思わない」と「そう思わない」を合わせた群（以下「そう思わない群」という。）から、「そう思う群」に移行した生徒の回答理由の変化である。

表３　生徒の回答理由の変化（抜粋）

生徒Ａ	（事前）体育は**体を動かすだけ**だと思っているから。
	（事後）スポーツと普段の生活が結びつき、社会に出てからも役に立つと思った。**特にスポーツと経済や産業を結びつけて考えること**も大人になったらあるかもしれないので、座学で体育を学ぶことは必要だと思った。
生徒Ｂ	（事前）**やったことがない**ので、あまり必要に感じない。
	（事後）体育理論を通して、**スポーツの価値観を知ることができた**。**もしこの授業を受けていなければスポーツの価値観が分からなかった**ので、必要。

※下線部、太字は筆者が加筆

事前では、生徒Ａのように“体育は実技のみ”という認識を持っていたり、生徒Ｂのように体育理論の学習内容がわかっていない生徒が、授業を受け、体育理論学習に意義を感じたことが、変容の要因であると考えられる。

図４は、事後アンケートでの各学習活動に係る４つの質問に回答してもらった結果である。

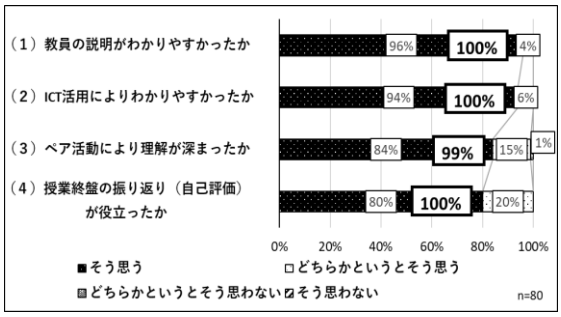


図４　各学習活動に係る質問に対する回答割合

「そう思う」群が（1）（2）（4）は100%、（3）は99%を占め、ほぼ全員の生徒が各学習活動を肯定的にとらえていたと考えられる。

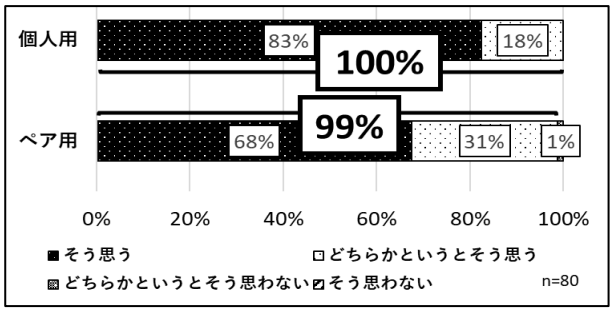


図５　教材プリントに係る質問に対する回答割合

図５は、事後アンケートで、「授業で使用した教材プリント(個人用、ペア用)はわかりやすかったですか」という質問に、回答してもらった結果である。

「そう思う」群が個人用は100%、ペアワーク用は99%を占め、ほぼ全員の生徒が今回の教材プリントを肯定的にとらえていたと考えられる。

表４は、６時間目に行った「これまで５時間の体育理論の学びの中で、最も印象的だった内容を選んでください」（多肢選択法で１つ選択）という質問に対する回答結果である。

表４「最も印象的だった内容」の集計結果

時間	学習内容	割合
1	スポーツの歴史的発展と変容	３%
2	スポーツの技術、戦術、ルールの変化	15%
3	オリンピックムーブメント	16%
4	オリンピックとドーピング	47%
5	スポーツの経済効果とスポーツ産業	19%

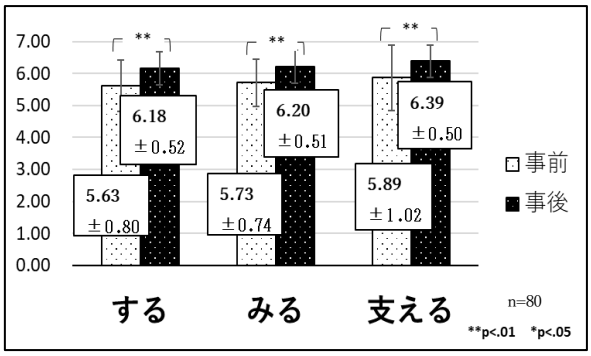
(n=79)

最も印象に残った内容は、４時間目の「オリンピックとドーピング」であり、全体の半数近くを占めた。今回の教材作成に当たっては、スポーツの恩恵と課題（スポーツの光と影）の対立構造で授業を組み立てることを重視したが、４時間目は、スポーツの良い部分、言い換えると「スポーツの光」の部分に反する「ドーピング」という「スポーツの影」の部分に触れ、掘り下げて学習したことが、生徒にとって衝撃的であり、印象に残ったと考えられる。

２　生徒の「スポーツの価値意識」が高まったか

図６は木村らの作成したスポーツの価値意識評価尺度[7)]※による結果から、「する」「みる」「支える」の平均値を求め、事前と事後を比較するため、１要因参加者内の分散分析を行い、その結果を示したグラフである。

※　「体力を向上させることができる」などの「する」の質問が22項目、「みる」が18項目、「支える」が15項目の計55項目からなる。



※数値は平均値±標準偏差

図６「スポーツの価値意識評価尺度」

「する」「みる」「支える」の３つの視点で、事前に比べ、事後の値が１%水準で有意に高まっており、生徒の「スポーツの価値意識」は、授業前に比べ、授業後に高まったと考えられる。

３　生徒の「スポーツとの多様な関わり方」の思考が広がったか

図７は、事前・事後アンケートにおいて「あなたは将来、スポーツとどのように関わっていきたいと考えていますか」に対する回答（自由記述）から、当センター指導主事２名と筆者で、キーワードを読み取り、「する」「みる」「支える」「知る」にカテゴライズし、その記述数を比較したものである。

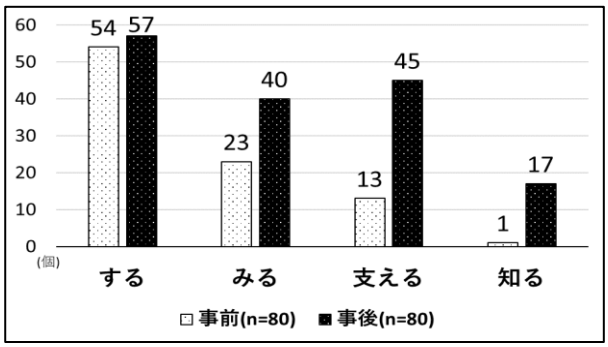


図７「する」「みる」「支える」「知る」の記述数

「支える」と「みる」「知る」が顕著に増え、思考が広がったと考えられる。「支える」については、４時間目で「スポーツ倫理」に触れ、日本人の「スポーツに対する高潔性」や「倫理観のある国民性」がアスリートを“支えている”という側面や、５時間目で「経済や産業の面からアスリートを支える」と

いう側面を学んだことが要因として考えられる。「みる」については、「メディアがルールに影響を与えている」等の知識の習得を通して、目に見えない背景等もみる視点を学んだことが要因として考えられる。また、「知る」については、体育理論は「知識に関する領域」であり、前述したように、新たな知識を得たことが要因として考えられる。

【研究のまとめ】

1　研究の成果と課題

（1）「する、みる、支える、知る」の視点獲得
ー体育の見方・考え方を働かせるためにー

生徒は、スポーツは「する」ものという認識が強く、他の視点は今まであまり意識したことがなかったと考えられる。今回の体育理論での学びを通して、感想に「オリンピックに関わりたい」「ビジネスの視点でスポーツに関わりたい」「数学者として支えたい」等の記述があり、「みる、支える、知る」という新たなスポーツとの関わり方が思考できるようになったと考えられる。

また、生徒の「今回の授業でスポーツへの見方・考え方が変わった」「新しい価値観を開いてくれた」「この授業後、全く違う考え方になっていた」といった記述からも「する、見る、支える」といったスポーツとの多様な関わり方を「知る」ことで、スポーツの価値意識が高まったと考えられる。

新解説において、体育の見方・考え方については次のように示されている[2)]。

「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」

また、新解説には、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になること。」とも示されており、本研究で、スポーツの価値意識を高め、スポーツとの多様な関わり方の思考を広げることができたことは、今後の体育の授業で、体育の見方・考え方を働かせることに、貢献できたのではないかと考える。

（2）生徒にとって魅力的な単元

今回の単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」に対し、生徒は高い興味関心を示した結果が得られた。

教材研究の際、生徒にぜひ伝えたいと思うエピソード等の素材がたくさんあり、何を教材とするか悩んだのも事実である。つまり、この単元は、生徒の興味・関心を喚起する素材が十分に存在し、教師が、教材研究に十分時間をかけることができれば、生徒にとって魅力的な単元になると考える。

（3）授業づくりについての提案

本研究を基に、体育理論の授業づくりのポイントについて、次のとおり提案する。

ア	学習指導要領解説を読み込み、指導内容を明確に把握する。
イ	アに対応した教材（教科書を含む）を準備する。その際、「する、みる、支える、知る」の視点も学べる教材を準備する。
ウ	見通しを立て、振り返りが行える学習ノートを準備する。できれば、生徒の振り返りに対し、コメントを書いて返却する。
エ	画像や動画など視覚に訴える教材を可能な限り準備する。（著作権等に十分配慮すること）
オ	教えることと考えることを意図的に配置する。

2　今後の展望

本研究では、体育理論と運動に関する領域との関連を追求するまでには至らなかった。特に、今回研究した学習内容は、スポーツの歴史や文化的な内容が中心であり、一般的に運動領域との関連付けが難しいことが想像できる。しかし、授業を終えた生徒たちの感想に、「スポーツの見方・考え方が変わった」「体育の取り組み方が変わりそう」等、運動に関する領域への良い影響が期待できる趣旨の記載が多数あった。

今後、体育理論と運動に関する領域とを効果的に関連付けるカリキュラム・マネジメントの研究が行われることを期待するとともに、自身の研究課題としたい。

【引用・参考文献】

1）中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』2016年 p. 187. 190

2）文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編・体育編』東山書房、2018年p. 8. 22. 186

3）佐藤豊・友添秀則編著『楽しい体育理論の授業をつくろう』大修館書店、2011年p. 6. 131

4）大越正大『楽しくわかる「体育理論」の実現に向けて』体育科教育、大修館書店、2016年10月 pp. 24-25

5）市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る』図書文化、2008年p. 3. 5

6）市川伸一『授業からの学校改革「教えて考えさせる授業」による主体的・対話的で深い習得』図書文化、2017年pp. 10-11

7）公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第３報-」2016年pp. 66-67